

宇多朝の菊と文章経国思想

——嵯峨朝重陽詩の受容——

The Chrysanthemum as the Poetic Symbol of Statecraft: Metamorphic Acceptance of Classical Chinese Writing of the Era of Emperor Saga (809-23) in the Era of Emperor Uda (887-97)

博士後期課程 日本文学専攻 二〇〇二年度入学

木 下 綾 子

KINOSHITA Ayako

序

『古今和歌集』の藤原敏行の歌（秋・下、二六六。注1）には、菊を比喩的に用いることによって、帝を賛美するという方法がみられる。

寛平御時、菊の花をよませ給うける としゆきの朝臣
久かたの雲のうへにて見る菊は天つ星とぞあやまたれける

この歌は、まだ殿上ゆるされざりける時に、召しあげられてつ
かうまつれるなむ

「寛平御時」は宇多天皇の時代である。「雲のうへ」は天皇の住まう内裏を指し、内裏の庭に咲く菊が天上の星に見立てられ、宇多帝への賛辞と

なっている。左注からは、まだ殿上を許される身分ではないのに、特別に天皇の御前に召され、帝恩に報いようとする敏行の気分の高揚が読み取られる。

鈴木日出男氏は、敏行と同時代人である菅原道真の詩賦「霜菊詩」や「未旦求衣賦」を挙げて、宇多朝において菊が「天皇の威徳を讃える観念」のもとで詠まれたことを示している（注2）。また、敏行歌の菊と星の見立て表現が、嵯峨朝の漢詩文に由来することは、つとに指摘されている。『経国集』巻第十三（雑詠三）の嵯峨天皇「雑言九日翫菊花篇」には「緑葉雲布す」「紫莖星羅す」、滋野善永の応製には「葉は雲の如し、花は星に似る」という一節がみられる。そして、さらに、それらの表現

には、類書である『芸文類聚』や『初学記』の「菊」項に所収の、晋の盧諶「菊賦」の「翠葉雲布し、黄萼星羅す」という先蹤があるという(注3)。

このように、敏行歌における菊の詠歌方法は、漢詩文の発想に基づいていると考えるのが妥当である。漢詩文においては、九月九日の重陽節に伴う宴の場で菊を詠じることによって帝に奉仕する、重陽詩という形式がある。特に、重陽を節会として定着させ、ほぼ毎年、神泉苑で御遊を兼ねた重陽宴を開いた嵯峨帝や、重陽後朝宴を創出したほか、数度の菊の詩宴を主催した宇多帝の時代は盛行期であり、菊の詩賦が数多く生産された。波戸岡旭氏が、重陽宴を通して、宇多帝に嵯峨朝文化を受け継ごうという意志のあったことを説いたとおり(注4)、兩朝の菊の関連は深い。しかし、その一方で、菊の詠作現場である重陽宴が、兩帝によって全く違った形に改変され、盛行期に導かれていることにも注目される。

以上のように、嵯峨朝と宇多朝は、菊の表現史において転換点であるといえる。本稿では、先に挙げた嵯峨朝と宇多朝の作品を中心に、兩朝における菊の違いを、背景にある文章経国思想も射程に入れて検討していく。そして、敏行歌にみられるような菊の喩義が、宇多朝漢詩文において発生することの意味を明らかにしたい。

一、嵯峨朝の菊

(一)

はじめに、宇多朝の先蹤となった、嵯峨朝の重陽詩における菊につい

て考えたい。作品が収められているのは、嵯峨朝の弘仁五年(八一四)に編まれた『凌雲集』、弘仁九年(八一八)の『文華秀麗集』、次代の淳和朝の天長四年(八二七)に成立した『経国集』という、いわゆる勅撰三集である。

嵯峨朝重陽詩の特色は、中国の悲秋文学の影響がみられることである(注5)。悲秋文学とは、元来、『楚辞』の宋玉「九弁」やそれに続く『文選』の潘岳「秋興賦」に代表される、秋の変衰する景物に寄せて自らの政治的不遇を託ち、愚かな君や佞臣を諷諫する作品群を指す。しかし、晋代以降は次第に「宮廷遊戯文学」的になっていき、単に「抽象化された、観念的悲秋」が政治に携わる人間の苦悩としてではなく「客観的」に描写されるようになったという(注6)。嵯峨朝詩壇において受容されたのは、主にこの晋代の作風だという(注7)。

では、悲秋文学の文脈のもとで、『古今和歌集』の典拠とされていた『経国集』巻第十三(雑詠三)一三八番、嵯峨帝の「雑言九日詠菊花篇」と、同一四〇番の滋野善永による応製を解釈してみたい。まずは、嵯峨御製の全文を掲げる(注8)。

沈寥兮曼穹

けつれう
びんまう
沈寥たり曼穹

蕭索兮涼風

せうさく
蕭索たり涼風

潦行収兮池沼潔

れいこうしゅう
潦行れ収まりて池沼潔し、

穉稍殞兮林莽空

ちせうおち
穉稍に殞ちて林莽空し。

菊之為草兮、寒花露更芳

菊の草たる、寒花露更に芳し、

自分独遅遇重陽

自分分とす独り遅く重陽に遇ふことを。

弱幹扶疎被曲丘

弱幹扶疎として曲丘に被る、

柔條婀娜影清流

綠葉雲布朔風澗

紫莖星羅南鴈羽

逸趣此時開野宴

登高遠望坐花院

翫菊花、菊花瓣黃

紛葩寂寂無人見

獨携菊酒擅情素

久□幽栖少与晤

花開花落秋將暮

秋去秋來人復故

人物蹉跎皆變衰

如何仙菊笑東籬

看花縱賞機事外

閑興攀花令節宜

盈把陶令、稱美鐘生

吾与二人愛晚榮

古今人共味

能除癘亦延齡

四句までは「九弁」を引用して晩秋の風景を形作る。一句「沈寥」は、

雲ひとつなく虚しく晴れた空の意味で、同作の「沈寥たり、天高くして

氣清し」に拠り、三句「潦行収兮池沼潔」は、夏の雨によって路上や庭

に溜まった濁り水が秋になって引いて澄んできた状態をいい、同作の

柔條婀娜として清流に影さす。

綠葉雲布す朔風の澗、

紫莖星羅す南鴈の羽、

逸趣此の時し野宴を開く、

登高遠望花院に坐る。

菊花を翫ぶ、菊花瓣黃たり、

紛葩寂寂として人の見ること無し。

独り菊酒を携へて情素を擅ぶ、

久しく幽栖□与に晤ること少なし。

花開き花落ち秋暮れなむとす、

秋去り秋来り人も復故る。

人物蹉跎にして皆變衰す、

如何にぞ仙菊東籬に笑むは。

花を看て縦賞す機事の外、

閑興花を攀つ令節宜し。

把に盈つ陶令、美を稱ぶ鐘生、

吾と二人と晚榮を愛づ。

古今の人共に味はふに、

能く癘を除き亦齡を延べむ。

能く癘を除き亦齡を延べむ。

能く癘を除き亦齡を延べむ。

能く癘を除き亦齡を延べむ。

能く癘を除き亦齡を延べむ。

「潦を収めて水清し」に拠る。次に、寒い中でも咲き残る菊の様子を

「綠葉雲布」、葉が雲のように広がり、「紫莖星羅」菊の紫色の莖が星の

ように連なり並んでいる、と表現する。「菊酒」「登高」など重陽の故事

を詠み込んでから、重陽節に独りきりで菊を愛玩する我が身と晩秋の悲

しさを嘆じる。十九句「變衰」は変化して衰える意で、「秋興賦」が要

約した「九弁」の主題を表す「善きかな宋玉の言に曰く、悲しきかな秋

の氣為るや、颺瑟として草木揺落して變衰し」からの引用である。そし

て、時が過ぎ人も事物も変化したなかで、「仙菊」時間の流れを超越し

た仙花の菊が、艷然と咲き誇っていることに對する驚きと憧れが述べら

れる。結びの四句では重陽詩の定石に倣い、「陶令」彭沢の泉令の陶淵

明や「鐘生」魏の鐘会といった、菊を愛した中国の詩人を詠み込む。

作品全体に通底するのは、たえず変化する悲秋の世界において、親し

い人々も過ぎ去るなか自らも變衰を抱えて生きるしかない、嵯峨帝の強

い孤独感である。よって、嵯峨帝の贊えている菊の美質とは、重陽詩の

原義に適うような菊の延命長寿の効用ではなく、永遠なる美と、ほかの

植物が枯れた後でも臆することなく咲き続ける、孤高を貫く強さであ

る。この作品において、菊は永遠性や勁直の象徴であるといえる。

それでは、臣下の側の詠作をみてみよう。善永の同一四〇番「雜言九

日翫菊花篇庖製」には、十一・二句に悲秋らしき表現があるが、嵯峨御

製のように栄枯盛衰を歎くわけではなく、庖製詩らしく帝の用いた典拠

を取り込みつつ長久を奉っている。

萋萋菊芳繞清潭

始有寒花一鴈南

萋萋たる菊芳清潭を繞り、

始めて寒花有りて一鴈南す。

岸色早深

岸色早く深く、

朝夜露余香

朝夜露に余香あり。

盈把□随陶元亮

盈把随はむとす陶元亮、

登高欲訪費長房

登高訪はむとす費長房。

滄英閑作湘南客

英を滄らひ閑かに作る湘南の客、

飲水延年酈北郷

水を飲み年を延ぶ酈北の郷。

翫黄花

黄花を翫ぶ、

黄花無厭日将斜

黄花厭ふこと無く日斜めならむとす。

影入三秋□宛浦

影は入る三秋□宛浦、

人伝往事旧龍沙

人は伝ふ往事旧龍沙。

葉如雲、花似星

葉は雲の如し、花は星に似る、

紛紛幾処満山亭

紛紛として幾処か山亭に満つ。

自有心中彭祖術

自づからに心中彭祖が術有り、

霜潭五美奉遐齡

霜潭の五美遐齡を奉らむ。

結び二句は、「心中」に「彭祖術」古代中国の長寿者の秘術をもった菊が帝に長寿を捧げる、という趣向になっている。そこに至るまでに、時の推移を表す悲秋の景物が挿入され、万物が避けえない衰退を菊だけが免れる、という表現がなされることで、対極にある菊の永遠性がより引き立つ。菊以外の物の枯れ衰える様子が描かれれば描かれるほど、菊の効用はますます強調され、臣下にとって悲秋文学は、従来の重陽詩よりも強く天皇への忠誠を表明するための方法となりうる。

ここで、注目すべきは菊の「五美」の処理である。「五美」とは、嵯峨御製にも触れられていた「鐘生」魏の鐘会の「菊花賦」にみえる、菊

の五つの美質のことである。その第一に「早きに植え晚きに登る、君子の徳なり」と、菊が早く生長し遅く実るのは君子の徳を表している、という文言がみえる。しかし、「菊花賦」において君子の徳の象徴である「五美」が、善永の詩においては「奉遐齡」と天皇の長寿を祈る表現に回収されている。つまり、菊の「五美」は長久の象徴としてしか機能しておらず、嵯峨帝の徳が明確に主題化されていないのである。加えて、ほかの悲秋の重陽詩のうち、自覚的に天皇の徳を仰ぐ例においては、菊ではない景物の比喩表現が選ばれていることも証拠となろう。東宮時代の淳和帝の「重陽節神泉苑賦秋可哀応製」における「小臣常に蒲柳の性もあるも、恩煦、蔽霜の飛ぶことを畏れず」という一節は、秋になると最初に散る川柳「蒲柳」が、天子の恵みである「恩煦」のあつさのお陰で「蔽霜」に耐えることができる、という意味であり、典拠の『論語』や『世説新語』においては、柳は「松柏」と対置される（注9）。また、『凌雲集』の「九月九日侍宴神泉苑各賦一物得秋柳応製」においても、「哀生れて謝らむとすと雖も封霜勅し、恩煦の余未だ秋に先だたず」と同様の発想がみえる。帝の恩徳を賛える場合には、まず臣下の脆弱さを霜に耐えきれない柳に喩えてから、霜を解かず「恩煦」を景物に置き換えずに直接的に述べたことが伺える（注10）。

つまり、重陽詩そのものは天皇賛美の言説であるが、そのなかで菊は永遠性や天皇の長寿の象徴であるものの、君子の徳という喩義は背負っていないのである。それでは、悲秋文学的重陽詩における菊の永遠性とは、結局のところ何を指すのだろうか。そこで浮上するのが、嵯峨朝に標榜された文章経国という観念である。

(二)

勅撰三集において、基本理念とされたのが文章経国思想である。文章経国という言葉は、魏の文帝(曹丕)の『典論』「論文」の「蓋し文章は経国の大業にして、不朽の盛事なり。年寿は時有りて尽き、榮榮は其の身に止る。二者は必至の常期あり、未だ文章の無窮なるに若かず」という一節による。これは、勅撰三集の始まりを飾る『凌雲集』序文の冒頭に掲げられたほか、『経国集』においては題名に引用され、当集の意義が「経国」にあったことを伺わせる。ただし、典拠である曹丕の説においても、それを引用した勅撰三集の説においても解釈が一定せず、「文章」の政治性や「文章」と国家経営の優先順位、中国の文学観の受容など、主に文学と政治の位置関係が問題とされてきた(注11)。

しかし、本稿においてはその内容に立ち入らず、あくまでも文章経国の、勅撰三集の編纂方針としての機能に注目したい。作品集の個々の作品は、ある特定の意図に基づいて収集され配置されており、編纂の際には新たな意味が付与され再生産される。これまで論じてきた悲秋文学的な重陽詩も、その構成単位である菊も例外ではなく、それ自体の意味とは別の、作品集の編纂意図に相応しい意味が構築されるのである。

では、『凌雲集』序における文章経国の揚言をみてみよう。

臣岑守言す。魏の文帝曰へるあり、文章は経国の大業にして、不朽の盛事なり。年寿は時ありて尽き、榮榮は其の身に止まると。信なるかな。……光陰の暮れ易きことを歎き、斯文の將に墜ちなむとすることを惜しみたまふ。

人間の寿命や榮光が限られているのと対照的な、文学の不朽性について

述べている。「光陰の」以降は、時の推移や文学作品の散逸を嵯峨帝が歎き惜しんだために当集が編纂された、という内容なので、文章経国説が当代の詩賦や名声を後世に残すという目的に援用されていることがわかる。『経国集』においても同様に、

夫れ貧賤なるときには則ち飢寒を懼る、富貴なるときには則ち逸楽を流(は)す。遂に目前の務を営みて、千載の功を遺る。是を以ちて古の作者は、身を翰墨に寄せ、意を篇籍に見し、飛馳の勢に託(た)かして、声名自らに後に伝はる。

という文言がみえる。前半は一般論として、「千載之功」千年後まで残る業績である文学を忘れ、目先の仕事をこなすことのみ陥りやすい様を描く。後半はそれと対照的な古代中国の作家について述べる。「翰墨」は筆と墨、「篇籍」は書物で、「飛馳之勢」権勢者にも頼らず文学に従事した結果、その文学上の名声は後世に伝わったという。ここでは、文学が「千載之功」とされること、また後世にまで名が残る作家が模範とされること、つまり文学の永遠性に価値が置かれていることに注意したい。序文の結び近くにおいても、「…名づけて『経国集』と曰ふ。冀はくは日月と映えて長く懸かり、鬼神と争ひて奥くあらむことを」と、『経国集』が日や月とともに永遠に輝いてほしい、「鬼神」精霊などの人知を超えたものと競うほど奥深くあつてほしいと、集の聖典化が強く祈念されている。

編纂者の立場からすれば、作品集が時代を超えて愛されることを願うのは当然である。ただし、この永遠性への強い希求の基底には、『典論』「論文」の「文章は経国の大業にして、不朽の盛事なり」という揚言が

あることを忘れてはならない。勅撰集の編纂に嵯峨天皇の文章経国の理想の実践をみるならば(注12)、文学の永遠性をことさらに強調することと、当集こそが後代に残るのにふさわしい、国家経営と一体化した理想の文学作品であることを主張し、当代においてこのような文治政治が成功を収めたことを、後の世に喧伝しようとする意図があったと思われる。

ただし、勅撰三集の集大成ともいうべき『経国集』成立の背景には、弘仁末期に飢饉や水旱により政治的危機を迎えた嵯峨天皇の退位があった。奢侈的な文事があまり行われなくなると同時に、文化政策だけでは立ち行かない現状を打破するために文学の経国的な部分がことさらに強調されたという。そのなかで『経国集』は、まさに「過ぎゆこうとしている嵯峨朝の文運隆盛時代を記念」するために編纂されたのである(注13)。ならば、『経国集』という金字塔が打ち立てられたことによって、嵯峨朝は後の文運の翳りを迎えた時代から、手本とされるべき漢詩文隆盛の御代として仰ぎ見られ、嵯峨帝は文雅の発展に努めた理想の王者として絶対化されたと思われる。

では、嵯峨朝の重陽詩はどのように位置づけられるのだろうか。『文華秀麗集』序文には、「鳳掖の宸章、龍闈の令製、別に綸旨を降す、俯して縹帙を同じくすと雖も、天尊く、地卑く、君唱へ臣和ふ」、尊貴なる帝の作品も下賤なる臣下の作品もひとつの集に収められるが、帝がうたい臣下が応じることで天地人の調和がはかられる、という趣旨の一節がみえる。このように、嵯峨帝と官人たちは詩宴の場において唱和することを通じて觀念を同じくし、また、詩の世界の上に俗世間から遊離し

た王道政治の理想郷を実現しようとしていた(注14)。そして、重陽宴は詩宴のなかでも規模が大きいと同時に、節会に伴ってほぼ毎年開催されており、嵯峨朝において詩が最も多く生産された場だといえる。加えて、重陽における天皇の延命長寿という主題が君臣間で繰り返したわれ深められており、帝に奉仕する意味合いが強いことから、君臣和楽の主な実践の場と見做すことができる。つまり、最大の詩宴であった重陽詩宴で詠まれた詩賦の数々も、君臣和楽の黄金時代を象徴する作品として理想化されたと思われる。

ならば、重陽詩における菊の意味はおのずから明らかになるだろう。ここまで嵯峨朝の文章経国思想を確認してきたのは、悲秋文学的な重陽詩における菊の永遠性というイメージと、勅撰三集における本集こそが後代に残る不朽の文学であるという主張が、対応関係にあると思われたからである。

先に、悲秋文学的な重陽詩における菊には、もともと重陽節会の主題であった天皇の延命長寿、あるいは不老不死をもたらす仙人の花という意味があること、加えて、悲秋文学の文脈における、万物が避けることのできない時の推移や事物の変衰に抵抗し永遠に枯れることのない花という意味があることを確認した。しかし、個々の作品が『経国集』の編纂の意図のもとに集全体の中に位置づけられると、菊は嵯峨朝の文章経国思想の最も簡単で、かつメッセージ性の強い宣伝材料になるのである。編纂の出発点には嵯峨讓位に伴う文運退潮があり、重要視されていた文学の永遠性や、嵯峨朝の文学空間の永続あるいは再興への諦めがある。だからかえって嵯峨朝が漢詩文隆盛の聖代であることや、その時代

に編まれた文学作品こそが不朽性をもつことが強く主張される。そして、嵯峨朝の文化政策である「君臣和楽」が重視されるならば、重陽詩は理想的な君臣唱和詩、すなわち文章経国思想に基づく永遠性をもった文学の最たるものとして追認され、絶対化される。よって、重陽詩の上に形成された観念世界において、菊は、時間の流れに打ち勝つ花として、文化の衰退や漢詩文の地位の凋落という現状を打開し、天皇に延命長寿を約束したように、文学に永遠性を与え、嵯峨朝の文章経国思想の永続をもたらす呪物とされたのであった。

以上のような菊の象徴的意味を汲み取り、嵯峨朝の文章経国思想を再現して自らの政治戦略に利用したのが、宇多天皇であった。

二、宇多朝の菊

(一)

宇多天皇による文章経国思想の実践と目されるのが、寛平二年（八九〇）閏九月十二日の宇多帝と十二人の儒者による詩作の場である。当日の様子は『日本紀略』に「儒士を禁中に召し、未旦求衣賦、霜菊詩等を賦さしむ」と記録され、菅原道真の詠作である「未旦求衣賦、霜菊詩等」は『菅家文章』に収められている。この「霜菊詩」（『菅家文章』四・三三二。注15）において、菊がどのように扱われるかみていきたい。

霜菊詩。 同じき日の序、并せて未旦求衣賦は別巻に在り。

肃氣凝菊壺 肃氣 菊壺に凝る

烈采帯寒霜 烈采 寒霜を帯ぶ

結取三危色 結び取る 三危の色

韜将五美香 韜み將る 五美の香

逼簾金碎鍊 簾に逼りて 金 碎鍊す

依砌麝穿囊 砌に依りて 麝 囊を穿つ

時報豊山警 時に豊山の警めを報ぐ

風伝麗水芳 風は麗水の芳しきを伝ふ

似星籠薄霧 星の薄き霧に籠れるが似し

同粉残残粧 粉の残んの粧ひに映れるに同じ

戴白知貞節 白きを戴きて 貞節を知る

深秋不畏涼 秋深くして 涼きを畏りず

一・二句で、秋の冷気が菊の畝に凝り固まり、清冽な菊花の枝に霜が降りている様が詠まれ、五・六句で舞台が内裏であることが明かされる。

菊は御簾の近くで「碎鍊」された「金」のように目映く、またその香りは、禁庭の敷石の近くで麝香の袋に穴をあけたように濃密である。転じて、故事の引用によって中国の風景が描写される。菊に霜の降りる夜を告げる「豊山」の鐘が響き渡り、菊の流れ込んでいる「麗水」の芳香が風によって伝わってくるという（注16）。そして、九・十句において、霜の生じた菊を「薄霧」のかかった「星」や、白粉のわずかに残った女性の顔に見立てる。菊と星の比喩は、先に挙げた嵯峨御製や滋野善永庇製においてもみられた。

結びには、道真が帝に忠誠を尽くし廷臣として生きていく覚悟が述べられる。文意は、霜に耐えて美しく咲く菊から「貞節」を学んだので、晩秋の厳しい寒さも恐るるに足りない、となる。嵯峨朝における東宮時代の淳和の作品にもみえる、脆弱な私が厳しい寒さを耐え抜けるのは帝

の恩恵があつてこそ、という、天皇を賛美する表現である。よつて、「貞節」なる菊には、天皇への忠誠を誓い王道政治を支える臣下という意味が託されている。淳和の作では、秋になると最初に散つてしまふ「蒲柳」しか提示されていなかったのに対し、道真の作においては、帝への忠誠の証しが、晩秋になつて霜をたたえても変わらず咲き続ける菊に具象化されている。宇多朝の菊には、嵯峨朝の菊にはなかつた王道政治の象徴、ひいては皇威の象徴という意味が付与されているといえよう。

この詩とともに詠まれた「未旦衣求賦」(七・五一六)の序文には、作詠に先立ち宇多天皇が群臣に説いた詩賦の心得がみえる。

勅ありて曰はく、「賦は古詩の流なり、詩は蓋し志の之く所なり。

各一篇を献して、具に汝が志を言へ。詩と云ひ賦と云ひ、一文一字も、其の興を風雲にすべからず、その詞を河漢にすべからず。未だ旦げざるに衣を求むとは、人主の政を思ふ道を陳べしめんと欲ふなり。寒霜晚菊とは、人臣貞を履む情を叙べしめんと欲ふなり」とのたまふ。

勅の前半の「賦は」で始まる一節は、ト子夏の「毛詩」大序(『詩経』大序)に影響を受けた、班固の「兩都賦序」の「或曰く、賦は古詩の流れなりと。昔、成康没して頌声寝み、王沢竭きて詩作らず」に基づく。「賦」は、「毛詩」大序に挙げられている詩の六義のひとつである。詩は為政者にとっては民衆を教化し、民衆にとっては為政者を諷諫するための文章と位置づけられているが、そのなかでも「賦」は直叙の文体を指す。「兩都賦序」の趣旨は、「賦」が「古詩」すなわち『詩経』の詩から発生した価値の高いものであること、そして、「成康」武王の子で

ある成王とその子の康王が没して、「王沢」王の恩恵が尽きて「古詩」が作られなくなつたが、それを継承するのが漢代の「賦」、すなわち漢代こそが理想的な王の御世である、ということである。また、「毛詩」大序は「詩は志の之く所なり。心に在るを志と為し、言に発するを詩と為す」と、「志」を言葉にして表したものが「詩」だと定義する。

以上のような、帝王の賛仰に直結する詩賦論の典拠をふまえた上で、詩賦の一字一句たりとも「風雲」や「河漢」のような実体的ないもののために無駄にすることなく、理想の王政、すなわち宇多帝の親政を賛仰するために使うべきだと主張している。具体的には、当日の賦題の「未旦求衣」については、天子の政道に心を砕く様子を詠むべきであり、詩題の「寒霜晚菊」については、廷臣が帝に抱く忠義の気持ちを述べるべきだといふ、政教主義的な文学論である。

ところで、賦の題名でもある「未旦求衣」は、寛平九年(八九七)に宇多帝が讓位する際に敦仁親王(のちの醍醐天皇)に与えた訓誡書、『寛平御遺誡』にも用いられている。現存の『寛平御遺誡』には実際の行政上の注意点を挙げる条が多いが、この条はめずらしく観念的であり、帝が普段から好んで使っていた親政に対する理念そのものとみなすことができる(注17)。

朕聞くならく、未だ旦げざるに衣を求むるの勤は、日ごとに服を整へ、盥嗽して神を拜す。また近くに公卿を喚びて、議し治すことあれば、治術を訪ふ。夕には本の座に還りて、侍臣を招き召して、六経の疑はしきことを求む。聖哲の君は、必ずしも補佐によりてもて事を治む。華夷寡小の人、何ぞ賢士なからむ。感をもて徹を教は

む。事疑を持つことあれば、必ずしも推し量りてもて決すべしときけり。新君慎め。

「未旦求衣」は『漢書』『離陽伝』の「始め孝文皇、帝の関に抛りて入りて立つや、心を寒くし志を銷して、明けざるに衣を求む」の引用である。文帝が関内に立つてみたところ、国難の多きにぞつとして、夜明け前から上衣を着て政治に励んだという。

宇多が理想の帝王像とするのは、中国の典例に鑑みて自分の政治に不審な点、反省すべき点があれば、どれほど些細なことでも下問するような、政道に熱心な聖君子である。そして、理想の政治とは、そのような君と君を補佐し諫言する臣下との連係によって成り立つという。それが、『寛平御遺誠』においては、新帝醍醐も常に道真の意見に従って政治を進めろ、という文脈に繋がっていくのであるが、『御遺誠』の新帝に政治の指針を示すという性質を除外したとしても、寛平二年の詩序にみえる宇多帝の政治理念が基本的には変化していないこと、また道真が宇多の政治理念の実現に地道に貢献してきた様子が伺える。というよりも、七年前の宴おける忠誠の誓いが、二人の政治の始まりだったのである。

(一)

寛平二年閏九月十二日の集会の意味を、当時の政治状況と会の形態という二点から考察したい。

寛平二年といえ、道真が前任地の讃岐から帰京した年である。式部少輔・文章博士・加賀権守であった道真は、仁和二年（八八六）に讃岐守に任官されて当地に下った。これを左遷と受け止めていたことは、客

居を嘆く詩作の数々に伺える。そして、翌三年に始まった阿衡の紛議において、道真は在京の学儒がこぞって摂関家の藤原基経にへつらい橘広相を窮地に陥れたことに憤り、岳父の島田忠臣に「天下の詩人京に在ること少らなり。況むやみな阿衡を論ずるに疲れ倦みにたらむや」(憶諸詩友、兼奉寄前濃州田別駕)四・二六三と書き送る。だが同四年十月、広相が罪に問われるに及ぶと、道真は基経に「奉昭宣公書」を上表し、文章道における断章取義はやむをえないことで、「阿衡」の職掌の有無を問うことは無意味であり、ましてや宇多の学問の師で親族でもある広相の怨みをかうことは藤原氏のために好ましくないと断じた。しかし結局のところ、事態は、基経の娘温子が宇多のもとに女御として入内することによって収拾したという。

そのような経緯があつて、寛平二年、京に戻った道真は宇多帝に所望されて宮中の詩宴に参加することになる。道真は分付受領が済んでおらず讃岐より放還されないうちに帰京したので、式部省による重陽宴の出席簿には載せられていなかったが、宇多の計らいにより別勅にて招待されたという。それ以前に、道真は三月三日の曲水宴にも招かれている。

「三月三日侍雅院賜侍臣曲水飲心製」(四・三二四)には、「四時王沢を歌はむことを廃めず。長く詩臣の外臣たらむことを断たむ」と、永久に帝のもとで「王沢」詩を詠じる「詩臣」たらんことの誓いと歓喜を謳い上げている。この作品に比べて九月九日の詠にはさすがに謙遜が先立っているが、閏九月十二日には、「詩臣」として宇多帝の要請に応え「未旦求衣賦」という荘重な「王沢」の賦を詠んだといえよう。

このころの道真の政治への姿勢を、藤原克己氏は「未旦求衣賦」と同

時期に詠まれた『莊子』逍遙遊篇を素材とする作品群「北溟章」「小知章」「堯讓章」(四・三三三〜三三五)から考察し、「逍遙一致思想」は「それが天分であるならば、政治に参加することをもまた「逍遙」であり「無為」である」という解釈が可能であることを示した。そして逍遙遊篇に基づく三作品は、帰京したばかりの道真がこれから厳しい中央の政治界で生きていくにあたって、「逍遙一致思想」のうちに「その精神の自由と安定のよすがを模索した」過程を表しているという(注18)。

加えて、寛平二年といえは、宇多が本格的に政治に着手し始める年、つまり関白藤原基経が亡くなる年の前年である。宇多は即位して三年経過してもなお、基経を憚って清涼殿でなく東宮御所に住んでいた。その反面、寛平元年(八八九)には正月の男踏歌、相撲の節会、十一月の賀茂臨時祭、翌二年(八九〇)には元日の四方拜を復活させ、民間で行われた五節供を導入するなど着々と朝儀を整えている。後から振り返ってみれば、宇多の親政への意欲が最高潮に達していた時期であったといえよう。

宇多には、これから儒教的理想に則った親政を展開するにあたって、側近となる儒者集団と結束を深める必要があった。その手本となったのが、詩作を通して天皇と文人が観念的共同体を形成していた嵯峨朝文壇であり、かつ嵯峨天皇の政治形態であった。十二日に内裏で行われたのは、宇多を中心とした新たな共同体を作るための試みであり、詩賦は誓いの場でなされた事実上の決意表明と考えてよいだろう。つまり、帰京以来道真は、親政という理想を謳い上げる「王沢」の「詩臣」という立場を取ってきたが、閏九月十二日の宇多の招待を受け詩賦によって

「志」を述べることを契機に宇多の思想に連なり、現実世界において政治に貢献していく決意がなされるのである。

それでは、次に集会の形態について考えたい。寛平二年には通常の九月九日の重陽宴のほかに、十日の後朝宴、閏九月十二日、二十九日と、全部で四回もの菊に関する詩作の集いが催されている。重陽宴とは別に後朝宴が開かれていること、また閏九月十二日と二十九日においても菊の詩がみえることに注意したい。閏九月十二日の詩作の会は、天皇の招きで禁中に臣下が参集し詩賦を詠じているが、宮廷行事に伴う公式の詩宴、あるいは遊宴という形式ではない。しかし、その場で作られた道真の「霜菊詩」は重陽宴における作品と酷似している。とはいえ、開催時期は閏九月であり、正式な重陽宴の行われる九月九日から遅れることは一ヶ月であって、素材の菊が「霜菊」になっている。そして、重陽宴ならば天皇と臣下が詩を唱和するので臣下の作品は応製詩であるはずだが、題の下に「応製」の文言はない。以上の違いを踏まえた上で、閏九月十二日の集会の意義を考えてみたい。

宇多帝の主催した菊の集いは、重陽宴がほぼ毎年行われたほかに、後朝宴が寛平元年、二、三、六、七、八年とあり、そして、讓位した年である寛平九年(八九七)からは場所を朱雀院に移して、醍醐帝主催の紫宸殿における重陽宴と張り合うように重陽後朝宴を開いている。寛平九年、昌泰元年(八九八)、三年とほぼ連続しているが、道真左遷のあった延喜元年(九〇一)からは暫くなく、延喜六年と七年に開催されている。やはり、その殆どが内宴で、宇多の近習や宇多の文章経国思想に共感する学儒たちのみが招かれる私的な集まりであったといえよう。宇多

の譲位後も宴の顔ぶれは殆ど替わらなかつたと思われるが、昌泰三年のみは宮中で公宴として行われており、宇多院に加えて醍醐帝が参加した。また、寛平元年、二、四、六、昌泰二年には、九月末に残菊を惜しむ宴も行われていた。後朝宴と合わせると在位中はほぼ毎年、重陽宴以外の宴があったことが分かる。

ところで、記録の残っているもので、寛平二年閏九月十二日のほかに後朝宴でもなく残菊の宴でもない菊の集いが三つある。まず、寛平六年九月十八日の公宴は、東宮敦仁が「霜菊」を植えて奏覧したので催されたものである。次に、同八年九月十六日の清涼殿の菊花宴は、『日本紀略』に「文人を召さず」とあり詩作が行われなかつたようだが、その意味については後考を待ちたい。そして、昌泰元年閏十月十七日の第九皇子邸における残菊の集いがある（注19）。第九皇子主催のこの宴は、九月十日の後朝宴において皇子の詠んだ詩に感動した、道真の提案により改めて行われた。その際に作られた「対残菊待寒月」（六・四五）には、かの有名な「況復んや詩人の俗物に非ざるはや」という文言がある。紀長谷雄による詩序にも「世の惑へる者、多く文士を嘲る。彼我観を殊にす。誰か敢て業を改めん」とあるように、詩人無用論を唱える通儒たちと「詩人」「文士」である自分を峻別するような強い自負が伺える。このように、宮廷行事とは別に、儒教的倫理観の強い学儒たちが菊のもとに参集して政教的な詩賦を謳い上げる、という集会の類型があったことをおさえておきたい。

次に、重陽後朝宴と残菊の宴における、菅原道真の詩の内容をみておきたい。正規の重陽宴とは違い、嵯峨朝の悲秋文学のような時の移り変

わりや、秋という季節、老いへの悲しみが主な素材になっている。ただし、道真の作品においては、菊も万物と同じく時の推移を免れず衰える様子が描かれる。老いの問題は、帝の恩沢に応えるには時間が足りないという天皇賛美の文脈に置き替わっている。例えば、寛平二年閏九月二十九日の残菊の宴における「閏九月尺燈下即事応製」（五・三三六）の序文には、「夫れ得て失ひ易きは時なり。感びて堪へ難きは情なり。宜なるかな睿情惜みて又（ま）に惜む」と、時の過ぎ去ること、情の移ること、ゆえに「睿情」帝の情を惜しむという詩の趣意が語られる。しかし、一方で、「菊は花の芳しきがために衰へてまた愛でらる。人は道の貴きに因りて去にてなほし留る」と、香りよい残菊の再び賞翫されるように、君子が文章道を重んじるお陰で道真が再び京に呼び戻されたことを感謝し、明日からは冬に入るが、「豈蕭蕭夢裡の遊びに勝（た）めや」、夢のように茫洋と過ごすものか、つまり恩義に報いるために働きたい、という決意が述べられる。ここに閏九月十二日の「未旦求衣賦」から続く、道真の気概が表れているといえようか。

しかし、寛平二年閏九月の詩作の集い以降有効であった、臣下の貞節を菊に形象させるという方法は次第に取られなくなっていく。寛平八年（八九六）の後朝宴における「九日後朝同賦秋深応製」（六・四三六）については、道真自身による「当時微諫に依りて、小讒を負へりき。応製のついでに、聊かに言に形（あら）せらるなり」という注が重要である。岩波大系本補注によると「微諫」とは、この年の七月五日に検税使を諸国に派遣するといふ議について、讃岐守としての経験から再考すべきと奏上したことを指す。それにより道真は周囲から非難されたので、何ら謗られる

所以のないことを述べたい、という。詩は中秋の悲しみを表すところから始まり、蘭や竹という貞徳の象徴を詠み込み、「明月」に託して明晰で澄んだ自分の志を述べている。後朝宴の詩において、帝に自分の政治的な立場や志の高さを訴えるが、菊が全く使用されていないことに注意したい。

また、宇多讓位後の朱雀院における後朝宴においては、菊に松が対置される。昌泰元年（八九八）の「九日後朝侍宴朱雀院同賦秋思入寒松庇太上皇製」（六・四四九）では、松の緑色の葉が不変であることが「霜墮つとも終に黄ちて落つる地なし」と述べられ、「昨新英の菊を甌ぶと云へども、豈有心老い難き容に若かめや」と、昨日内裏の重陽宴で見た新しい菊の花よりも、本日の朱雀院の「有心」、志ある常緑の松の方が優れており、宇多に長寿を約束するはずだという。菊には醍醐帝に対する忠誠、松には宇多上皇に対する忠誠が表現されており、景物に託して宇多と醍醐を比較した上で、宇多の方に貞節を貫くことを述べる。

だが、特に注目すべき作品は、その前年の寛平九年（八九七）、宇多讓位後に初めて開かれた重陽後朝宴で詠まれた「九日後朝侍朱雀院同賦閑居楽秋水応太上天皇製」である（六・四四三）。谷口孝介氏は、この作品が、寛平の治の始動した寛平三年の「重陽後朝同賦秋雁槽声来応製」（五・三四九）を踏まえ、老荘思想によって宇多を仙人に見立て、その政治形態を「玄談」と捉えていることを指摘している。また、宇多の居住空間である朱雀院が、内裏と同等に扱われるなど「特権的に肥大化」していることから、道真は、寛平二年の『莊子』逍遙遊篇を典拠とする三作品でうたった理想の政治を、今まさに朱雀院における宇多院の

政治として現出させようとしている、と論じた（注20）。

ここで振り返りたいのは、嵯峨朝において菊には仙界への憧れが託されていたことである。讓位後の朱雀院における宇多を、道真が儒教と老荘の両方の思想から理想の王者と捉えていたならば、その象徴として菊が用いられなかったのはなぜだろうか。

それは、宇多讓位後に決定的になった両者の思想的なずれにあると思われる。道真が、日頃から「風流と王道政治の矛盾」を強く感じており、文雅や仏教に傾く宇多に追従できなかったことが指摘されている（注21）。同作品の「残菊猶し旧気を含めり」や「老松弥新青に染みにたり」、昌泰元年の後朝宴の「寒松」は、宇多に貞節を誓いながらも役目を果せず年老いていく道真自身の比喩であって、宇多に対する諷諫だという。道真のもっていた老荘思想が、あくまでも儒教的理想に基づいた「逍遙一致思想」であり、朱雀院において宇多を理想の帝王として演出していたとするならば、道真は、現実を背を向け風流韻事に耽る宇多とは背反せざるをえないのである。また、道真にとって菊は、あくまでも天皇に対する貞節を意味していたのである。つまり、「詩臣」である道真にとって、菊はあくまでも重陽宴の場で帝の徳を賛えるための景物であるのではないか。それまで如何に宇多帝を菊の比喩によって賞賛してきたとはいえ、位を去ればもう天皇ではなく、菊は相応しくないのである。

寛平二年閏九月十二日の集会において作られた、君子宇多帝と賢臣道真による理想的な政治の象徴という菊のイメージは、両者の間で菊の詩賦が交されるたびに、天皇親政宣言を再現し固定化するはずであった。

しかし、次第に風流志向に傾き儒教的理想から遠ざかっていった宇多朝を前に、道真は菊の喩を用いなくなるのであった。

結

以上、『古今和歌集』の藤原敏行歌にみえる菊の用法を端緒に、嵯峨朝の重陽詩と宇多朝の詩賦における菊の相違を検討した。その結果、嵯峨朝において帝の延命長寿や永遠性という意味であったのが、宇多朝に至って帝の威徳という象徴性が付与されたことがわかった。

その直接の転換点が、寛平二年閏九月十二日の菊の詩会である。この詩会は、親政の理想に燃える宇多帝が、今後政治をとにもする側近や学儒に菊を題材とした君臣唱和詩を作らせることで、絶対の忠誠を誓わせようとするものであった。宇多帝は、勅撰三集における菊を嵯峨帝の文治政策の象徴と捉えており、その重陽宴を再現することで彼朝のような君臣関係を構築する意図をもっていた。

文運隆盛の嵯峨朝では、「文章は経国の大業なり」という揚言のもとに詩文の制作が国家経営に列なると信じられており、対策文など実務的な政治に直結する文章のみならず、宴遊において君臣が相交じり観念的共同体を形成するための詩賦も、王道政治に欠くことのできないものであった。それに比べ、寛平初年には撰閑家の台頭と文章経国思想の衰退によって、嵯峨朝において自明のものであった天皇と官人の観念的共同体が存在しなかった。そこで登用されたのが菅原道真という、天皇を政治の中心に戴き文章による奉仕を自らの天分とする、「王沢」の「詩臣」であった。宇多は、寛平元年に一度主催した後朝宴を、より嵯峨朝の重

陽宴に近いものにするために、道真を含む十二人の学儒を臨時に招いて菊の詩作の集いを開いたといえる。そして宇多は、自分のもつ政治理念を道真らに共有させるために、言志の詩を詠せしめたのである。文章経国説によらなかつたのは、宇多には嵯峨帝のような群臣の中心としての機能が欠けていたため、臣下ひとりひとりに自らを称揚させることによって帝としての権威を高め、君臣の対を複数つくることで集団を形成したのであろう。

宇多にとって、天皇主導の政治は理想に過ぎず、文学空間においてしか再現できないことが痛感されていたからこそ、かえって天皇親政が宣言されたのである。そのような状況において、菊は嵯峨朝の君臣和楽の場の象徴であり、菊のもとで詩宴を開くことで、その永遠性に託し、嵯峨帝のような文化天皇として永久に君臨することを願ったのではないだろうか。

注

※漢詩文の引用は、原則として題は白文のまま、本文は書き下し文とした。なお、表記は適宜改めた。

(1) 『古今和歌集』は小沢正夫(校注・訳)小学館日本古典文学全集本による。

(2) 鈴木日出男「古今集とその周辺」『国文学』26・12、S. 59・9

なお、敏行歌を引き歌とするのが、『源氏物語』の太政大臣の歌である。藤裏葉巻において「太上天皇に准ふ御位」を得た光源氏を、「むらさきの雲にまがへる菊の花にこりなき世の星かとぞみる」と贅えている。鈴木氏は、同様に、敏行歌を媒介にして宇多朝漢詩文の発想を指摘しているが(光源氏の栄華―光源氏論(4) 秋山虔・木村正中・清水好子(編)『講座源氏物語の世界』6、有斐閣、S. 56・12)、一方で、余田充氏や浅尾広良

氏によって嵯峨朝重陽詩を直接の典拠とする見解が示されている(余田充「藤葉巻の『菊』をめぐる贈答歌群—平安初期宮廷詩の投影—」『論考平安王朝の文学—一条朝の前と後—』新典社、H10・11/浅尾広良「嵯峨朝復古の桐壺帝—朱雀院行幸と花宴—」『歴史との往還』論叢源氏物語2、新典社、H12・5)。光源氏の人物造型に関わる部分だけに慎重を期したが、この問題については、本稿を踏まえた上で別稿にて論じらるるつもりである。

(3) 小島憲之「詩より和歌へ」『上代日本文学と中国文学—出典論を中心とする比較文学的考察—』下巻、塙書房、S46・10

(4) 波戸岡旭「菅原道真「九月十日」の詩について」『漢文学会々報』35、H1・12

(5) 嵯峨朝悲秋文学の研究史については、佐藤信一「平安前期漢文学研究の現在」(『国文学解釈と鑑賞』55・10、H2・10)に詳しい。

(6) 波戸岡旭「嵯峨天皇と重陽詩賦」『上代漢詩文と中国文学』笠間叢書227、笠間書院、H1・11

(7) 半谷芳文「経国集「重陽節、神泉苑、賦秋可哀」—勅撰三漢詩集論考III—」早稲田大学大学院中古文文学研究会(編)『源氏物語と平安文学』4、早稲田大学出版部、H7・5

(8) 『凌雲集』『経国集』は小島憲之『国風暗黒時代の文学』(塙書房)、『文華秀麗集』は同(校注)岩波日本古典大系本による。

(9) 「子曰、歳寒、然後知松柏之後彫也。」(『論語』「子罕第九」二百三十三節。吉田賢抗の明治書院新釈漢文大系本による。)

「願悦与_二簡文_一同年、而髮蚤白。簡文曰、卿何以先白。对曰、蒲柳之姿、望_レ秋而落、松柏之質、凌_レ霜猶茂。「二」願愷之為_二父伝_一曰、君以_二直道_一、陸_二遲於世_一。入見_レ王、王髮無_二三毛_一、而君已斑白。問_レ君年、乃曰、卿何偏早白。君曰、松柏之姿、凌_レ霜猶茂。臣楸柳之質、望_レ秋先零。受_レ命之異也。王称_レ善久_レ之。」(『世説新語』「言語第二」。目加田誠の新釈漢文大系本による。)

(10) なお、『文華秀麗集』「九日落葉篇」に至っては、重陽宴の催されている神泉苑の風景が悲秋の主題のもとに詠まれるのので、応製詩においても、菊も出てこなければ帝の長久の祈念という重陽詩の常套句すら使われな

い。『文華秀麗集』が勅撰三集のなかで最も嵯峨朝の詩風や美意識に忠実であるとする(後藤昭雄「『文華秀麗集』の位置」『平安朝漢文学論考』桜楓社、S56・9)、嵯峨朝においては、重陽詩における表立った皇統賛美よりも、悲秋文学という共通の主題のもとに応製奉和がなされることの方が重要視されたといえないだろうか。そしてその結果、悲秋のテーマと相容れない菊が用いられなくなったのではないか。

(11) 小島憲之「文章は経国の大業なり」『国風暗黒時代の文学中(上)—弘仁期の文学を中心として—』塙書房、S48・1など。

(12) 後藤昭雄「嵯峨天皇と弘仁期詩壇」前掲(10)著。

(13) 藤原克己「嵯峨朝の政治文化と勅撰三集」『菅原道真と平安朝漢文学』東京大学出版会、H13・5

(14) 鈴木日出男「嵯峨文学圈—九世紀文学史覚書—」『文学・語学』68、S48・8

(15) 『菅家文章』は川口久雄(校注)岩波日本古典文学大系本による。以下、『菅家文章』の引用は巻数と作品番号のみ付す。

(16) 本間洋一氏は、「菅原道真の菊の詩について」(『東洋文化』復刊55、S60・8)の注九において、「麗水」の「麗」は「麗」に通じると指摘している。『芸文類聚』「菊」所収の『風俗通』によれば、「麗」の「甘谷」の水である「甘谷」の上流の山には大きな菊が自生しており、その滋液を飲んだ谷の人々が長寿を得たという、重陽節の菊酒の由来となった伝説がある。

(17) 藤原克己「詩人鴻儒菅原道真」前掲(13)著。

(18) 前掲(17)論。

(19) 第九皇子は、宇多第九皇子敦実親王(大系本の補注1)のほか、齊世親王(「残菊」対ひて寒月を待つ)『本朝文粹』の注24、清和第九皇子の貞真親王(後藤昭雄「文人相軽」前掲(18)著)とする説がある。第九皇子は「文体凡に非ず、興託観つべし。近代の皇子、この比有らず」と絶賛されており、文運隆盛を招く次代の帝として望まれていたのではないか。

(20) 谷口孝介「古今集への道—宇多院と菅原道真—」『古今集と漢文学』和漢比較文学叢書11、汲古書院、H4・9

(21) 前掲(17)論。